

# 「数々擯出」

——教典史学への試論——

高橋堯昭

もう何回、この素末なレストハウスに宿ったことだろう。ガンダーラの中心マルダンの郊外、アシヨカの碑文のあるシャバーズガリの遺跡の近く、政府関係出張役人の宿。勿論観光客など来ないから、ろくなフロントもなく、管理人の老人とボーイが廊下で所在なく、しゃがんでいる。

ガンダーラの平野をぐるりと、とりまく山々の遺跡を、今日はメハサンダ、明日はジャマールガリ、そしてタレリ、或はシクリ等、地元の古老をつれて歩いている。せつかく、ここまで来たのだからと、つい無理をして登り、傷めた膝がうずいてねむられない。ましてや、ガンダーラは内陸だから、十一月から三月までは夜は冷える。十分なお湯も出ず、風呂にも入れないから、まんじりともしないで夜を明かすことも何晩か。たまたま、とろりとすると変な夢を見た。

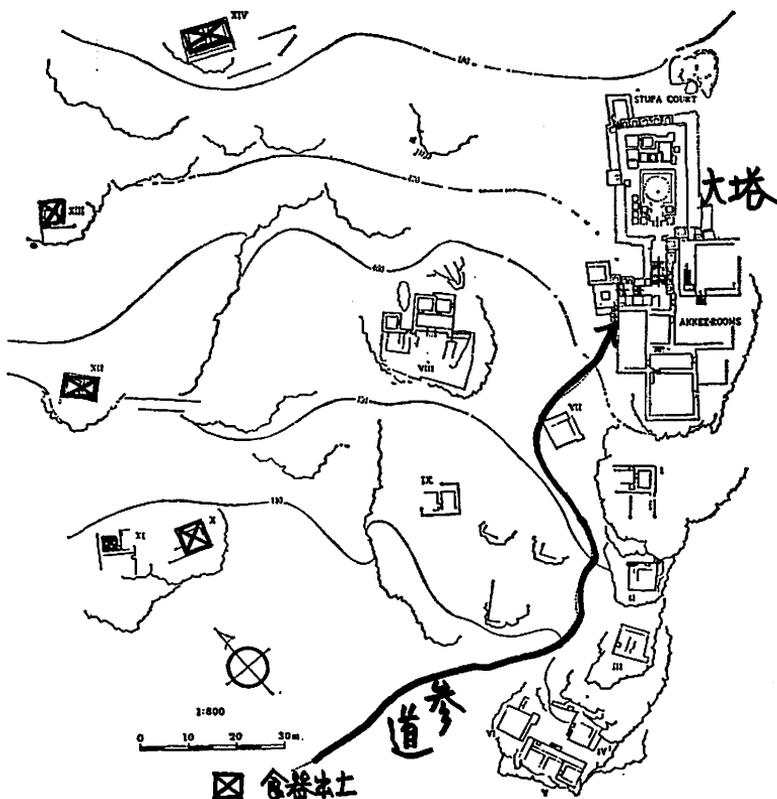
マンガの休憩さんのような短い袴をはいた私が鍋をかぶってメハサンダの急坂を駆け下りて来る。後から大勢の僧や信者が追っかけて来て石を投げる。そのばらばらとんで来る石が、カンカンとかぶった鉄の鍋にあたる。「はっ」として目がさめた。何のことはない。寝返りを打った頭が素末なベットの鉄の柵にぶつかったのだ。昨日見て来たメハサンダの山寺の印象が余りにも強烈だったので、こんな夢を見たのであろう。

「数々擯出」(高橋)

私は常々、遺跡から当時の僧院生活ひいてその主行事たる仏塔崇拜を類推、經典の文字と照し合せ、二方面から考えたらと思つて歩いてゐる。

特にメハサンダ・ラルマそしてバサーワルの遺跡に教団の分派を思わせるものが見い出される。然し、これらがいつ分派して行つたかは、はっきりしない。それらから出土するのはクシャンのバステーバ王のコインや、ササーノ・クシャンのコインだから、般若経や法華経が成立する時期より、大分後で、もうそ

イ. メハサンダ



の頃には大乘教団は出現していたと考えられるから、大乘仏教成立時の証拠とはならない。然し、これらを通じて「推測」の一助にはなるだろうと思つて、大胆な仮説を試みる。

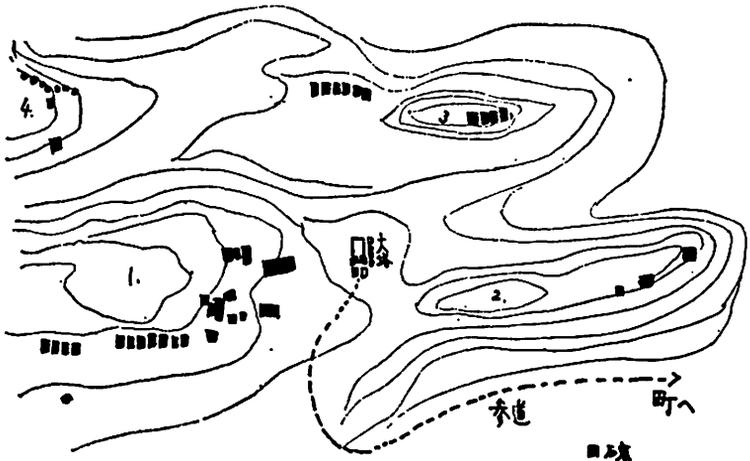
(1) 布施太子の故地といわれるメハサンダは特別な寺である。主塔から尾根伝いに連らなつて作られた僧院からはんの少し離れた三、四カ所の小僧院からは食器が出土し、本院の方の僧院からは出土していない。それはこの住僧は食堂で食事していたことを示す。従つてこの山には食事を共にしないグループが存在していたことになる。小乗か大乘かは分らない。小乗どうしの他の部派かも知れないが、小乗と大乘とでは食べものが違うから、小乗のメハサンダの本院と異つた、大乘のはしりの小グループが存在していたと考える方が自然であろう。このような食事を共にしない僧院はジャマールガリ等にも見い出される。

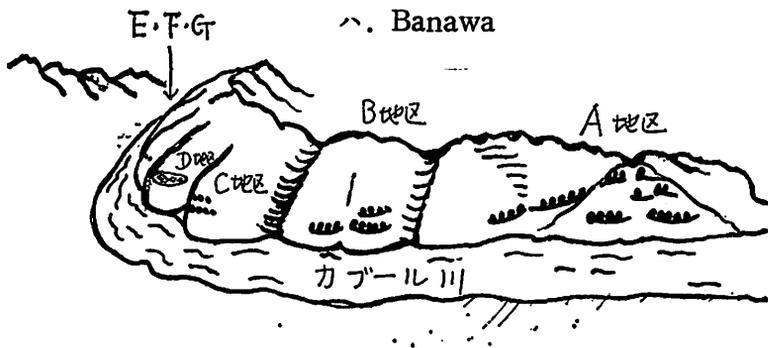
(2) ラルマも、同様に、他の部派に分裂して行つたと思われる所で、アフガニスタンのジュララバード近くのハツダ遺跡のはずれに位置している。

「数々撰出」(高橋)

ロ. Lalma

4. 312





地図(回)の如く、四つの尾根の麓に窟が存在する。そして町から一番手近な岡の上に主塔の跡があって、これに町の人々は参詣した。勿も一般の民衆だけではなく、この四つの岡の麓の窟院の住僧も、ここに詣でて、この主塔を中心に統一ある寺を形成していたと思われる。

然し京大隊の調査で、グルーブの窟のある岡の上に二、三の塔の跡らしきものが見られるから、時代がたつと、手近な塔に参詣するようになって行ったことが推定される。<sup>(3)</sup>

(ハ)バサワール石窟も興味ある遺跡である。カイバー峠を越えてアフガニスタンに入り、ジェラバードの町に入る手前で、カブール川の対岸にそそり立つ岩山である。ドラムカンをも四つ並べた筏で渡った私には思い出深い所である。

岩山に虫が食ったように、点々と堀られた窟は、一見無造作に並んでいるようだが、京大隊の発掘調査で、六群になっていることがわかった。然もその六群が、夫々独立な機能をそなえていることから、独立した派になっていても不思議ではないという状況になっていたと思われる。即ち(1)方柱窟といって、窟の中心に方柱を彫り残し、それをストウパーの代りに繞道するよう作られていたもの。(2)尊像窟、これは仏像や彫刻を祀った窟で、仏伝やジャータカを通じて、仏の教えを学ぶ所である。(3)僧衆窟、僧の住居である。これら三つがワンセットになっ

て寺の機能を果していた。

区	A	B	C	D	E	G
方柱窟	2	1	1	×	×	1
尊像窟	20	12	8	1	1	2
僧衆窟	21	17	31	5	12	12

に石積み(4)の尊像窟が作られるようになった。従って尊像窟の少なくなるのは、逆に、むしろ造像の、即ち仏教の隆盛を暗示していると京大の報告書は言っている。

かくて僧衆窟に住み、方柱窟で繞道修業し、尊像窟で仏伝や教儀を味わうという、ワンセットの機能をそなえたグループが六つもある。このことは取りも直さず、分裂とまで行かなくとも、自然にグループ分けが行われて行ったことを証していると思われる。

これにヒントを与えてくれるものとして、現代のインドの宗教事情がある。即ち、ガンジス川がヒマラヤ山系から大平原に移る所に、リシケシというヒンズー教有数の聖地がある。そこに散在するアシラムでは、有名な指導者が亡くなると、信者は立派な僧を求めて他のアシラムに移り、かつて隆盛を誇っていたアシラムが衰退して行く

「教々抽出」(高橋)

これらは、大体後三五〇年頃から五〇〇年頃までに、このような形態になって行ったと推定される。問題はD・Eに方柱窟がないのは、地上に作られたか(特にD地区には地上の建物の跡が多い)、さもなくば仏像に重点が置かれて、もともとからなかったのでは、とも考えられる。これはバミヤンが五世紀頃に、仏塔から仏像へと信仰対象が変わって行ったことと考え合せて、かく推測される。更に、尊像窟が少くなるのは、当時はストッコの造像が盛んになる頃で、安易に仏像の奉獻が出来たので、石窟のように長い時間と労力(5)のかかる掘鑿は、その需要に応じ切れなくなり、窟外

いう。このことは、日本の、宗派の本山の宿坊が、縁故とか形だけの法縁でつながっているのと違って、指導者から指導者によって栄えて行くさまを見る時、前述の遺跡には、それぞれ指導者の得意とする教学を求めて僧が集り、従って段々グループ分けされて行き、最後に分派して行ったのであろう。

かく、私は、これらの遺跡を念頭に置いて、教典の文字。それも「文底」にかくされた事実を推量しようと思う。



法華経は実に不思議な經典である。迫害とそれに耐えよという文字で埋っている。そして又「たとえ一句一偈でも」という無数の言葉が続く。

これは、インドの宗教を長く見て来た私には考えられないことである。即ちエローラの石窟を見ても、仏教ヒンズー教ジャイナ教が窟を連らねて、一つ所に共在していた。アショカ大王然り、彼は仏教に寄依しながらも、他宗教を併せ保護していた。過去の事実だけではない、現在の民衆も、ヒンズー教徒でありながら、仏教の聖地に詣でる。釈尊成道の菩提樹下にヒンズー教徒が一日中坐って冥想していても異和感もない。勿も、彼等にとっては、釈迦はヴィシュヌの十番目の化身には違いないが。

このような、すべてが調和する世界たるインドの考え方と、法華経乃至大乘仏教には、何かしら異質のものを感ずる。即ち、一仏乗の一神論と、「数々擷出」等の非難迫害の文字である。大乘仏教は法華経の久遠本仏、浄土三部経の阿弥陀一仏、般若波羅蜜多の仏母等、「一仏」をとなえ、今までに共存したインドの汎神論、即ち、仏はすべてのものに内在するという立場から、起越的な一神論へ変り。そして又悟るという立場から、仏にすがり救済を仰ぐ方

向、即ち仏を内から外へ求めて行つた。これこそ、モンズーンインドの汎神論から、砂漠的宗教に共通な、一神論への思想的な転回である。このことを私は、異端を徹底的に許さず、ひたすら砂漠の砂に伏し又、金曜礼拝のモスクに集る大群衆を見るにつけ、エローラの共存の立場との差を考えさせられるのである。

そのインドの共存の立場を、はつきり否定したのが「三乗の否定」である。「三乗は方便にすぎず、それを金科玉条とするお前達は、悟りに遠くはなれている」との方便品の文字は、やはりガンダーラという乾燥的風土の中で生れた論理である、と私は考へる。

勿も現在、タレリーやジャマールガリの遺跡から眺められるガンダーラの平野は、緑り一色の畑でうまり、岩だらけの山々と美しいコントラストをなしているが、これは戦後外国の援助により、スワット川からの灌漑で、このようになったのであつて、私が三十年前、はじめて来た時には、ペシャワルからカイバー峠にかけて、現在もひろがっている砂漠の如く、盛気楼の舞う広漠たる荒地であつた。考古学的に見て、二千年前は現在程、乾燥していなかったとはいへ、緑りのあつた所は、やはりカブール川と、スワット川の流域のみであつたと推定されるからである。かかるが故にこうした砂漠的風土が法華経の三乗批判と、それに附随する迫害の「一つの基盤」であつたと私は考へる。



法華経の中に散見する非難迫害の大きな原因は、勿論他教への批判である。当時の既成の仏教の中には、次の法華経の経文の文字の如く、私同様耳のいたい僧も多々いたであらう。

「知慧劣るものたちは、森林での生活(阿練若)を守り、ぼろをつぎつた衣(納衣)をまとつただけで、『我々は耐えの生活をし

「数々擧出」(高橋)

「数々擯出」(高橋)

「有阿練若、納衣在空閑、自謂行真道、輕賤人間者」<sup>(7)</sup>  
「悪意をいただき、心がひねくれ、欺瞞的で、愚かで、しかも思いついていて、未だ得ていないのに得ていると妄想するでしょう」<sup>(8)</sup>

「惡世中比丘、邪知心謠曲、未得謂行真道、我慢心充滿」<sup>(9)</sup>

「味覚の楽しみに貪りとらわれているものが、在家の人に教えをとき、六種の神通をそなえた(阿羅漢)のように敬まわれるであらう」<sup>(10)</sup>

「貪著利養故、与白衣說法、為世所恭敬如六通羅漢」<sup>(11)</sup>  
と、当時の出家仏教を批判して、在家仏教の正法性を標榜する意欲がうかがわれる。

これが同じ大乘系の宝積経になると、もっと痛烈である。

1、「人里はなれた所に居を占めて、在家とも出家とも交らず、ことば少なく、談合することも多くはない。しかし、この沙門のこのような行住坐臥は(供養者)をあざむく口先だけの欺瞞の産物にはかならない。心を潜めるためでもなく、静けさや寂けさを得るためのものでもなく、修練のためのものでもない」<sup>(12)</sup>

2、「この世間のある種の沙門は、自分が戒をまもっていることを、如何に他人に知ってもらおうかと考えて戒を守る。……それらは他人にみせびらかすためであって、世をいとうためでもなく、欲情を離れる為でなく……名与や名声や賞讃を追求する沙門である」<sup>(13)</sup>

3、「彼等小乗の比丘たちは、鳥のように尊大で横柄で悪意が激しい。私の教説に対するねたみと、慢心と傲りの火にやかれている」<sup>(14)</sup>

4、「酒の酔いに酔って、村の家々のまわりをうろつきまわる」<sup>(15)</sup>

5、「ほとけの教えを、人々に与えるところの徳の集積である聖典を捨て置き、彼等は常に人々のあいだに便りを取りつく為、世

信をもち運ぶ<sup>(16)</sup>」

6、「牝牛やロバや馬といった家畜が施与されることによって……もっぱら耕作や商取引に心が注がる」<sup>(17)</sup>

7、「塔や僧団に属する物品か、彼等自身か、の、みさかいいもない」<sup>(18)</sup>

8、「出家していながら、彼等が愛欲を欲求することはなはだしく、『けっして愛欲にふけてはならない、それはおん身を畜生や餓鬼や地獄の境涯におとすものである』と常に在家者に説くが、彼等自身の心は少しも自制されていない」<sup>(18)</sup>

9、「森の中に住んでも、彼等の心は村里に達しているであろう、煩惱の火に焼かれている彼等の心はけっして安らかに落ちつてはいない」<sup>(20)</sup>

等々、僧への批判は延々と続く、然し立派な僧もいたことは、次の文字から知られる。

「そういう末の時代にあつてなお、いぜんとして戒行と徳をそなえている人々は、かえって蔑視される。彼等は村や都会を去って森林に住むことになるであろう」<sup>(21)</sup>

かく真面目な僧が寺にいらなくなるような墮落した教団として、既成の仏教に対する批判はますます鋭く、又そのことを通じて自らの正当性、そして使命觀にもえることになる。

こうなると、新興の大乗グループは、前掲3の「私説に対するねたみと、慢心と傲りの火に焼かれている」の如く、既成教団からの攻撃をまともにもうけることになる。

「常に大衆の中にあつて、我等を毀らんと欲するが故に、国王大臣婆羅門居士及び余の比丘衆に向つて誹謗して、我が悪を説いて、是れ邪見の人、外道の論議を説く」(法華経勸持品)

「是の愚人人は我が法中において沙門となり、返りて般若波羅蜜多を誹謗して道に非らずという」(道行般若経)

「愚人が般若仏説を誹謗して、これ仏説に非らず、若しは魔、若しは魔民の作るところならん」と。(大智度論卷六三、釈信誹品 卷六八)

「教々擯出」(高橋)



タフト・イー・パーヒー僧院複現図(原図カラチ博)

かく既成仏教からの非難迫害が強ければ強い程、新興のグループは法は荘麗な山頂の寺々に、ではなく、真面目に法を受持読誦解説書写する所にある。その所こそ道場であるという意識がわいて来る。

そもそも、ガンダーラの遺跡をめぐり歩く時、当時如何に仏塔信仰が盛んであったかが、実感出来る。即ち大きな主塔のまわりには無数の奉獻塔。クフト・イー・パーヒーのように、主塔のまわりに奉獻塔や巨大な仏龕の列、その中には二メートルにも達する仏像やストウーバが安置されたであろう。このような本山級の大寺院ならずとも、例えば、スワットのプトカラ遺跡から約一キロ、新たに発掘された小さな寺の遺跡でも、主塔のまわりには、やはり大きな仏龕で主塔をぐるりととりまき、無数のチャイトヤ堂が完全に残っているから、大きな寺でなくとも、如何に多くの仏塔でうまっていたかがわかる。

こうなると小乗の寺への攻撃は勢い、そのシンボルたる仏塔崇拜の否定に向けられる。それに加えてもともと仏塔

崇拜は積尊の遺命にそむくものとして僧はこれにかかわらなかつたことによる。即ち大般涅槃經の有名な言葉に

「阿難よ、汝等は舍利供養に奉仕してはならない。最高善のために努力せよ……阿難よ、如来は信心厚き刹帝利の賢者婆羅門の賢者居士の賢者がありて如来の舍利供養をなすであらう」

とある如く、本来は出家のたずさわるものではなかつた。

然しアシヨカ王の八万四千の仏塔供養に象徴されるように、仏塔供養が余りにも盛んになると、かたくなに、仏塔供養を否定していた部派も、この趨勢をうけ入れざるを得なくなつた。そして、まず僧院の外に遠慮がちに安置し祀つた。それが段々大きく増巾(22)されて、荘大になり、且又僧院内にもとり入れられるようになった。(23)かくて、この仏塔供養が小乗仏教の寺々で極めて大きなウエイトをもつようになり、又大乗の徒にはそれが小乗仏教のそのシンボルとも思われであらう。このような情勢下

「教々擯出」(高橋)



ニモグラムの遺跡(右端が法のチャイトヤ)

「數々擧出」(高橋)

に「法を觀する」在家教団は後述の事例の如く「仏塔否定」を旗じるしとして成長して行ったのは当然のことであつた。

「如来滅後、若有受持說誦、為他人說、若自書、若教人書、供養經卷、不須復起塔寺及造僧坊、供養衆僧」(分別功德品)

「如来滅後、若有受持說誦為他人說、若自書若教人書供養經卷、不須能持是經、兼行布施持戒忍辱精進一心知慧、其德最勝無量無邊」(分別功德品)

と、これと同じことが寶積經郁迦長者經にある。

「世尊たちのために、それぞれ寶石の塔を建て……僧伽に対してもいのちの限りあらゆる快い道具を用いて給仕しても……この經説を受持せず、身につけず、口に唱えず……他をしてそれに入らしめないならば、この菩薩は過去にせよ、未來にせよ、現在にせよ、如来を供養したことになる<sup>(24)</sup>」

「もし菩薩があつて、この教説を聞き……正法が久しく世にとどまるようにするならば、この菩薩は過去未來現在のもろもろのほ<sup>(25)</sup>とけ、世尊に供養したことになる」

「かの愚痴の人は我が法の中において出家を得たりといえども、我が法を解せず、出家の行を捨て、ただ塔廟舍利を供養し、自活のための故に、衣鉢を得んが為に、利養のための故に、名聞の為の故に、この事をなさんが故に舍利を供養するなり……迦葉よ、まさに來るべき世の後の五百歳に於ては相似の沙門あつて、衣服形貌は沙門に似せれども、戒は相似す、定は相似す、慧は相似ざるものあり<sup>(26)</sup>」

とあり、又般若經系では

「供養されるべき完全に悟つた如来たちの全知者性は知慧の完成から生じたもの……如来の遺骨の供養は全知者に根拠をもっている。……知慧の完成を書物のかたちだけでもして保存し、安置するとしよう。更に、この知慧の完成を花……旗を供え……灯明や花輪を供えて恭敬し……カウシカよ、七宝ででき、如来の遺骨を納めたストゥーパを建立することより生ずる福德の集積は、その百分の一千分の一、コーティー分の一……にも及ばない<sup>(27)</sup>」

等、同様の趣旨の所は未だ未だある。特に興味ある所は

「アーナンダよ、この知慧の完成が世間に流布している限り、如来は(そこに)存在すると知り、如来が教えを説いているのだと知りなさい。……次のような有情は如来の近くを住いとしていたのだと知りなさい。(すなわち)知慧の完成を聞き、習い、覚え、唱え、理解し、宣布し、説き、述べ教示し、誦誦し、書写し、花、薫香香料花環塗香粉香僧衣傘幢鈴旗を供え、また周辺にも灯明や花環を供え、種々の供養の仕方をもって恭敬し、尊重し奉仕し、供養し、讃嘆し、祈願するだろうものたちは」(引線筆者)

と仏塔供養を否定している。

更に阿弥陀経には、阿弥陀の二十四願中、第六願「仏塔の願」の

「若し善男子善女人が我が国に來生せんと欲して我を用いるが故に、益々善を作し、若しくは分檀布施し、塔を造り焼香し、花を散じ灯を燃し……塔を起し寺を作り」(28)

の立場から段々願が進むにつれ、名号の受持が強くなると、遂に塔崇拜がなくなつて行く。

かく当時の新興の在家教団が共通に旗じるしとしたのは、仏塔の否定と、經典即ち法の重視であつた。法華経もこの時代の流れに、さからうものではないことは勿論である。



前述の八千頌般若経の「知慧の完成が流布した所、そこに如来はある」ということは、当然どこでも道場であるという事に連らなる。

小乗の立派な寺だけが道場だけではなく、山かげの庵や町の在家の家の中で、細々と然も真面目に「受持誦誦解説書写する所が道場」であるということになる。

「若經卷所住之處、若於園中、若於林中、若於樹下、若於僧坊、若白衣舍若在殿堂、若山谷曠野、是中皆応、起塔供養、所以者何、当知是処即是道場、諸仏於此、得阿耨多羅三藐三菩提、諸仏於此、転於法輪諸仏於此、而般涅槃」(神力品)

これは又、宝塔品の、法華經の説かれる所、いづくなりとも宝塔が涌現するということと同じである。

然しながら、こうした仏塔否定の流れにあって、法華經だけは少々ニュアンスが違っている。前述の神力品にしても「そこに塔を建てよ」と依然、「仏イコール塔」という表現になっている。

勿も、塚本博士によると、「サンスリクト原典は Cātīya (支提・制多・祠堂・廟)と Sūpa (塔・窣堵波)を区別しているが、「妙法華」では両者を区別しないで、「塔」と訳しているとし(法華經の成立と背景一五一頁)

妙法華で「阿逸多よ、この善男子等女人の若しくは坐し若しくは立ち、若しくは経行せん処、この中に、即ち応に塔を建つべし、一切の天人は皆応に供養すること塔の如くすべし」(岩波文庫法華經六四頁)

とあるのが、ケルン本では

「アジタよ、この善男子、善女人が住し、坐し、経行する所には、アジタよ、如来のために支提(Cātīya)が建立さるべきである。これは如来の塔(Sūpa)であると、諸天を共なる世間(の人びと)によって言わるべきである」(塚本氏同書一五四頁)

と舍利塔と、「法」を納めたチャイトヤ堂と区別されている。

従って法華經も八千頌般若經の如く舍利塔を否定し、「法」を安置した支提 Cātīya を強調し、「法」の重視に向っているのであって、けつして小乗のような舍利塔崇拝に逆もどりするものではないことは勿論である。

そもそも礼拝の対象は塔からチャイトヤ堂に、そしてその中に安置するものは仏像に変わって行くのが歴史的傾向である。これは遺跡が雄弁に物語っている。即ちタキシラのシルカップに、サカ・パルタイ時代の馬蹄型のチャイトヤ堂が出現し、塔自体がお堂の内に安置されるようになって来た。アジャンタやカルラー・バジャー・カンヘリー等の

窟院も同じ形式になっている。勿も窟院は塔自体が窟の中に安置されるのは当然であるが、地上の建物としては、サンチー大塔の近くにチャイトヤ堂が残り、又ナガールジュナコンダの窟院には入口内部の両側に向き合う形で、二つのチャイトヤ堂が作られている。そして内に仏像と塔が安置された跡が残っている。

かく、多くの事例からストウーバからチャイトヤ堂に変わって行く傾向が跡付けられる。従って塔自体もこうした傾向から「舍利」の塔から「法」の塔に性格が変わって行ったことであろう。妙法華とサンスクリット本の差というのは、このような過渡的な時代を表わしているように私には思われてならない。

特にスワットの奥地のニモグラム（写真参照）に実にユニークな仏塔が見られる。即ち、仏・法・僧三宝の三つの塔が並んで作られている。その中で、「法」の塔は、内に経典を納めるような、チャイトヤ堂になっているのが注目される。又法華経のギルギット本で有名なギルギット文書の出土した塔も、その覆鉢体の内に木箱があって、中に経典が多数安置されていたことから考えると、八千頌般若経の「知慧の完成を書物のかたちにし、……花旗を供え、灯明や花輪を供し……」（前掲注27）の文字が実証されていると思う。

そもそも法華経は布施博士をはじめとして多くの学者によって、成立の時期を異にするものの集合であるとされている。即ち塔の建立とその供養をすすめる方便品等の第一期のものは、舍利供養が流行となり、それまでは「舍利供養は在家のもの」（大般涅槃経）として、かかわらなかつた教団も遂に無視出来なくなつて、これをとり入れた小乗仏教時代の影響が残っている時期のものと私は考える。これが、

「舍利を供養するものは……沙を聚めて仏塔を作れる、かくの如き、諸々の人等は皆已に仏道を成じたり」（岩波文庫法華経上一

二二—二四）

「数々撰出」（高橋）

「ジナのために塔を(建立せん)とする子供らはすべて覺りを得るものとなった」(ケルン本法華經二章偈七九)の表現となつたのである。

然し時代は變つて行く、第二期の法師品以後の「舍利塔」から「法の塔」の重視は、勢い、前述の如きチャイトヤ堂の造立をすすめる時代と並行して行つた。且つ又かく法華經自体、思想的に深化發展して行つたのであるが、この二つの立場が、一つの經典の中に並存し、猶前述の羅什訳の神力品の、「そこに塔を建てよ」の文章や、チャイトヤ堂といつても内に安置する塔が舍利塔か法の塔かは一見區別出来ず、第三者からは理解されずに、矛盾・不徹底と、指摘されるに至つたのは、止むを得ない面があつたと言わざるを得ない。ここに法華經の「迫害・非難」の宿命性を見るのである。



さて、ここで当時の小乗仏教を考えてみよう。その内部にはそろそろ大乘仏教に心をよせる僧も出てくることか次の經文から理解される。

- 1、「彼は僧院に入つたら、誰れが多くを學んだ比丘か、だれがよく、法を説く比丘か、だれがよく戒律を保つ比丘か、だれが戒律の要綱を保持する比丘か、だれが善薩を保持する比丘か、だれが……誰が三昧にいそむ比丘か、だれが善薩乘の比丘か……」<sup>(30)</sup>
- 2、「一切の二乗の儀式を行すると現じて、内々には諸々の善薩の行を捨てず」<sup>(31)</sup>(引線筆者)

と、然しかく僧が心をよせるだけではなく、小乗仏教の僧伽自体の中に、所謂大乘的な考え方が出てくることは注意さるべきである。時代はとうとうと、このような方向に進んで行つたことが、小乗仏教の僧伽への寄附銘文から知ら

れる。

(1) ビマールン出土舍利容器

世尊の舍利に対して……「一切諸仏への供養のために……（サカ族の王アゼスの銅貨が伴出……前一世紀にまでさかのぼる）」<sup>(92)</sup>  
(2) マトウーラ出土獅子柱頭銘文

説一切有部の所領として、「一切諸仏の供養と法への供養僧伽への供養としてサカ国への供養として（サカは前一世紀から一後世紀）」<sup>(93)</sup>

(3) カラワン出土銘文（有部の寺）

アゼスの一三四年……「一切衆生のため……（この福業が）涅槃の証得をもたらさんことを（後七十七年）」<sup>(94)</sup>

(4) カプール西方三十マイル Wardak 出土舍利壺銘文

一切衆生に対して無病が、更に地獄より最高の存在に至るまでのすべてのもの……更に邪信の人に対しても最上の福が（後一七九年）この寺は大衆部の所領である。<sup>(95)</sup>」

(5) ナガールジュナコンダ大塔石柱銘文（大衆部、西山部、セイロン上座部の寺があった）

過去現在未来の人々への回向として……彼等が両方の世界（現在・未来）に於て利益と安楽を得んが為に、又彼女自身が涅槃の至福を獲得できるように、又一切世界の利益と安楽を得んと願って（後三世紀）<sup>(96)</sup>（点線は筆者）

即ち、前一世紀から後一世紀までに「一切諸仏」が出、(3)の如く、後七十七年には「受記」思想とも思われる考えが出、(4)の如く、二世紀後半には悪人成仏の考え方が、又三世紀には(5)の如く、「三世」という考え方が出ている。

特にこれらの銘文を貫いている考え方は、「自分の為した行為の功德が第三者に向けられる」という、「利他」の思想である。かく、大乘の考え方が当時の小乗の僧の中にも、或は僧伽にも侵入して行ったことがわかる。

然して、これらの大乘的な考え方は一体どこから起ったのであろうか。

「教々撰出」（高橋）

「教々擯出」(高橋)

「出家の菩薩が、この經を求めて自家の家に居ても過失はない。又この經卷を受持諷誦する菩薩がいると聞けば、遠方であっても、出かけて行って、この經卷を供養し、或は許可を得て、書写すべきである」<sup>(37)</sup>

の阿闍世經徳号法經の文字の如く、在家の家や小さな庵を中心にして起ったと思われる。<sup>(38)</sup>

然して小乗の寺の中や、メハサンダの如く、小乗の寺の近くで(食事を共にしないグループを大乘のはしりと仮定して)、大乘に心をよせる僧達がいても、それが「ひそかに」内々に行われていたら、それ程問題でなかったろう。

即ち

「彼等は激しく欠点をいいつのこともない。更に他の声聞の道に属する比丘たちの名をあげて非難することもなく、咎めだてすることもなく、彼等に敵対心をいだくこともない」<sup>(39)</sup>

「この經典を愚かな人の前では、けつして説いてはならない」<sup>(40)</sup>

「誰かの悪口を言ってはならない。異った見解を述べてはならない」<sup>(41)</sup>

「この經典を秘かに匿<sup>かく</sup>れてでも、あるいは誰か一人の人のために説き明すなら」<sup>(42)</sup>

と。然し大乘が段々力がついて来て、

「良家の子等よ、あなた方は、この上ない正しい菩提から、遠くはなれ、あなたがたは、それ(菩提)にあらわれることはない、あなたがたは、完全な怠惰な暮しを送っていて、かの(如来の)知をさとすることは出来ない」<sup>(43)</sup>

というような高飛車な態度をとるに至ると、

「眉をひそめられたり、くり返しくり返し、何度も(座席を)割り当てられなかったり、精舎からい追出されたり、種々の悪口雑言をあびせられて」<sup>(44)</sup>「悪口而聲聲、教々見擯出、遠離於塔寺」(勸持品)

と、意地悪されたり、追放の憂き目を見るに至る。このような攻撃は、小乗の寺や近くに住むだけでなく、先程の經

文の町の中の白家の家に住み、大乘に心をよせる人達にも当然加えられる。教義的だけでなく、スポンサーの信者達との経済的な関係による小乗教団の危機感も加って。

然し、何より、小乗の彼等が我慢ならなかったのは、自分達が、釈尊の金言として伝来した阿含等の所依の經典を方便品の所説の如く「方便」即ち本当のものでないといひ放つただけでなく、あまつさえ新興のグループが自分勝手に經典を編纂したものを、「經」とまでいっていることであつた。

即ち阿難四事經に

「世に高節清潔無欲なる沙門梵志あり、この曹高の口の述べる所は皆これ諸仏の遺典なり」

と大乘側が公然と言ひ放っているのに対して、

『これらの比丘は異教徒であつて、利得と名与にとらわれて、自分達の勝手気ままの言い分を教える』と……<sup>(45)</sup>

「利得と名与を求めて、自分で經典を編纂して、集会の中で説教すると私共を罵る」<sup>(46)</sup>

「私共のことを非難して異教の教儀をひろめる……」<sup>(47)</sup>

「ヤクシヤの形相をした多くの比丘たちが私どもを罵倒しようとも」<sup>(48)</sup>

と小乗教徒の非難のさまが、經典の中にはっきりとよみとられる。更に常不輕菩薩に対する迫害に於て「増上慢の比丘比丘尼優婆塞優婆夷」とはっきり「四部ありて」といっている。かくて迫害は僧によるだけではなく小乗を信する在家の人々からもうけたことが理解される。

然して、更に私はこの迫害誹謗はこの小乗四部の衆だけではなく、大乘側からもあつたと考える。

「さらに又、マンジュシリーよ、如来が完全な涅槃にはいったのち、正しい教えが消滅に瀕する最後の時代において、この經典を受持している菩薩大士は（他人を）うらやむことなく、偽ることなく、欺くこともない菩薩大士であつて、菩薩の道に属する他の

人を非難せず、誹らず、輕蔑しない。(この經典の受持者は) 声聞の道に属するものであれ、独覺の道に属するものであれ、菩薩の道に属するものであれ、他の比丘比丘尼信男信女たちに、心の困惑疑悔を起させることはない。「良家の子らよ、あなた方はこの上ない正しい菩提から遠くはなれ、あなたがたが(菩提)にあらわれることはない……」と言つて菩薩の道に属する何ものにも、心の困惑をひきおこすことはない」(引線筆者)

この經文は、法が消滅に類する最後の時代に於いて、「快い触れ合いの中で、危害をうけずに、この法門を説きひろめる」には「菩薩の道に属する他の人を非難せず、誹らず輕蔑しない」ことが必要であり、これが第三の安樂行だと説いている一節である。このことを裏返してみると現実はそうではなく、他と争いがあったことを示している。そもそも教団で律や戒が規定されるのは、或る一つの問題が起つた時、今後そのようなことが起らないよう、その都度その都度、新たな律や戒がきめられて行つて大部な律藏の体系が出来たように、菩薩の道に属する他の人といろいろのトラブルがあつたからこそ、この教えが示されたのだと私は考える。八千頌般若經にも、左の經典が残されている。

「アーナンダよ、菩薩大士は別の菩薩乘によつて修業する人々にどのような態度で接したらよいか……恰も教師に対するよう接すべき……実にこれらの菩薩大士は私と同一の物に乗り……私と同じ乘に進み入つたものたちである」(引線筆者)

やはりこの經典も大乘と大乘との間に論争非難があつたことを裏付けている。そしてそれなるが故に、特に大乘の仲間どうしは他を非難し合つてはいけなさと經典ではいつているのだと推測する。

特に宝積經の「菩薩の仏塔供養」に対して非常にきびしい文字が連らねられているのが注意されねばならない。

「当来、末世、後の五百歳に諸々の菩薩及び諸々の比丘でありて、身を修めず、戒を修めず活命の爲の故に仏塔及び仏舍利を供養し、涅槃の爲にせず、離欲の爲にせずして、然も供養を修す」(引線筆者)

「当来、末世、後の五百歳に諸々の菩薩ありて悪友に親近し、少しく経を誦誦し、ただ供養の業をなす。香花瓔珞幡蓋灯明をもつて如来の舍利塔廟を供養するのみ。迦葉よ、我れ在家の無智の衆生に善根を植えさしめんが為に舍利を供養せんことを説けるに、かのもろもろの痴人、我が意を解せずして、唯この業をなすのみ」<sup>(82)</sup>

共に「菩薩ありて」とはっきり、大乘の仲間の中に、このような仏塔供養の徒があつたことをしるしている。

法華経は他の大乘の仲間と共に仏塔否定から「法」の受持誦誦解説書写を強調しながらも、猶前述の如き誤解をうけるようなまぎらわしい表現があるので、他派は小乗と同じように考え我慢が出来なかつたことであらう。だからこそ、この宝積経の文字の如く、大乘側からも非難されて法華経は両面からの攻撃にさらされることになつた。勸持品の忍と安樂行品の四安樂行が要請されたのは、このようななきびしい状況を反映するものであつたと思われる。



かくなると、大小両面からうける非難迫害に、じつと耐えることが、仏の遺命であり、逆にそれを受けること自体が正法のしるしだとの信念をいさぐ。「たとえ一偈たりとも受持誦誦解説書」の言葉が満ち充ちていることは、このことを表わしている。

勿も、この「一偈だけでも」という立場は非難迫害という点だけからは解釈されないことは十分承知している。これは法華経だけでなく、当時の大乘仏教に共通した言葉である。

「『大いなる宝の集り』という經典の王のなかの、ただ一つの詩頌だけでも把握し、記憶するであらうならば……先の人（七宝の塔を建てた人）の上に集積される功德は百分の一、千分の一、百万分の一にも達しない」<sup>(83)</sup>

「アーナンダよ、菩薩がこの經典から離れずにいるならば、彼は仏から離れず、仏に近侍している」<sup>(84)</sup>

「教々擯出」(高橋)

「教々擯出」(高橋)

即ち、これは一偈でも受持すれば、それがそのまま「仏と共にある」ことだという、大乘仏教の特徴たる「信」を単的にあらわしていると言えよう。これは小乗仏教の理論的な、所謂「知解」というものから、「バクティ・唯信」に移り行くもの、即ち大いなるものに、ひたすら随順帰依する道であった。

然し私がここでとりあげたいのは、大乘小乗両面の非難迫害の只中であって、この法華經を受持することは実にむずかしい、即ち「此經難持」の危機感がひしひしとせまって来るのを感じる。故に經典全体でなくてもその中の「たとえ一句一偈」でもという所に切実感が示めされているように思える。故に「一偈でも受持すれば」……

- 1、「正しいさとりを得る尊敬さるべき如来となる」<sup>(55)</sup>
- 2、「如来とみなさるべく」<sup>(56)</sup>
- 3、「如来に等しき」<sup>(57)</sup>
- 4、「如来の使者」<sup>(58)</sup>
- 5、「如来のなすべき仕事をはたすものとして如来によって使わされたもの」<sup>(59)</sup>
- 6、「如来の装身具によって飾られたもの」<sup>(60)</sup>
- 7、「如来を肩に担うもの」<sup>(61)</sup>
- 8、「如来の法衣につつまれているもの」<sup>(62)</sup>
- 9、「如来の御手で頭をなでられたもの」<sup>(63)</sup>
- 10、「寿命の長さの説示という法門が説かれるのを衆生が一度でもきけば正しい菩提から退くという道理はない」<sup>(64)</sup>
- 11、「……その福德は無限」<sup>(65)</sup>ということになる。

このように、くり返し、くり返し、説いているのは、その一層の切実感からであって、他教の「仏と共にある」と

いう自覚より一層深い自覚であったと考える。これは頭で考えた「仏と共にある」というのではなく、日蓮聖人のいう色説、この体で仏と共にあり、「仏の御手の中に救われている自分」を悟る立場である。従って、それは意識とは言えず「意識を超えた意識」である。かく「此経難事」の世の中、大小両乗の非難迫害が多ければ多い程、この「一偈」の受持の自覚は大きくなる。私は、この言葉にその時代の「危機感のこの上もなく大きい」のを推測し、然もそうした中で、この経を受持する、むずかしさと、小さな弱い自己と、それなるが故に、「一偈」にでも、しがみついて行く切実な声をきくのである。かくて、末世の困難さ、非難迫害こそ、より深い「信」への大いなる原動力であることを、この「たとえ一句一偈」の中にそこに見るのである。



このように考えて来ると、法華経にあらわされた文字は、単なる信仰という觀念の世界だけではなく、当時の宗教界、ひいてその置かれていた社会情況を示すものと思われる。即ち一例として、あの国王大臣を枕頭によびつける信解品の長者、これこそクシャン時代、シルクロードを介する東西通商で巨利を得た資産者の出現を示し、譬喩品の「一門の家」の譬は、教義的な「三車火宅」即ち「三乗から一仏乗」という教義の問題だけではなく、当時の村や家の構造を反映していると思う。即ち今カイバール峠附近のパターン族の村や家を尋ねる時、すべての家がこの構造であり、又これらをとりまく城壁のような壁で部落がぐるりと囲まれている。異民族の侵攻はなほだしいこの地で、防衛上一門が要請されたのである。これを見た時、タキシラのギリシャ人の町シルカップがやはり一門の城<sup>(66)</sup>であった等を考え合せ、經典は当時の姿を案外忠実に伝えているのではなからうかと思つた。更にこうした事実から、類推する

「教々擷出」(高橋)

時、メハサンダ、ラルマ・バサーワルの遺構も案外、經典に示された迫害や、一句一偈の問題を考えるのに、大きな示唆を与えてくれるものと思われる。

旧訳聖書が、歴史的事実を反映しているものとして、古代史学者に見直され、「聖書史学」という新分野が成立しているように、私は經典の中で、何気なく見過されている言葉のはしはしに、法華經成立時代、否、ひいて大乘仏教の興隆時代の諸環境を示す資料が多く見い出されるのではないかと、「仮称教典史学」というものを考えながら遺跡を歩いている。この「教々擷出」はこのような見地から、敢て行った冒險的試論であるとも言えよう。

〔註〕

- (1) 京大メハサンダ六二頁―六三頁
- (2) 小乗は殺すのを見たり、自分のために殺したりする肉は食べられない。勿論大乘は不殺生故食べられない。
- (3) 京大 Durman Tepe and Lalma planā
- (4) 京大 Basawal 五十頁
- (5) 石窟では仏像もストウーバも窟と一体的に彫る後から作るのではない。
- (6) 大乘仏典法華經 2、たゆまぬ努力(勸持品) 偈四
- (7) 岩波文庫法華經中 二二六頁
- (8) 大乘仏典法華經 2 偈四
- (9) 岩波中 二二六頁
- (10) 大乘―仏典法華經 2 偈六
- (11) 岩―中 三三六頁
- (12) 大乘仏典宝積經迦葉品 九十頁
- (13) 〃 〃 九十一―九十一頁
- (14) 〃 〃 一七四頁

- (15) 〃
- (16) 〃
- (17) 〃
- (18) 〃
- (19) 〃 一七五頁
- (20) 〃 一七六頁
- (21) 〃 一七八頁
- (22) 同心円状増巾、バイシヤリー塔、フトカラ塔、他の塔を中に入れて増巾……タレリー、クナーラ
- (23) タキシラ、ビツバラ塔(マーシヤル・タキシラ参照)
- (24) 大乗仏典宝積経郁迦長者経 三一二頁
- (25) 〃 三二三頁
- (26) 宝積経 大正11―五二二頁
- (27) 大乗仏典八千頌般若経I第三章知慧の完成とストーパ 一〇二頁
- (28) 〃 II 第三十二章委託 三七三―四頁
- (29) 大正3―三〇一中
- (30) 大乗仏典宝積経郁迦長者経 二七八頁
- (31) 仏説首楞嚴三昧経 大正15―六三一の下
- (32) 静谷目録 一七三〇
- (33) 〃 一七六二
- (34) 〃 一七四五
- (35) 〃 一八〇一
- (36) 〃 六六八
- (37) 阿闍仏国経徳号法経 大正11―七六三下―七六四上
- (38) 現存の寺は碑銘からほとんど小乗、わずかに部派を記さない寺少々

「数々抽出」(高橋)

「数々抽出」(高橋)

- (39) 大乘仏典法華経 下六九頁  
 (40) 岩波法華経 上二一七頁  
 (41) 岩波文庫法華経 中二六五頁  
 (42) 岩波文庫法華経 中一四七頁  
 (43) 大乘仏典法華経 2 七二頁  
 (44) 大乘仏典法華経 2 六十頁  
 (45) 大乘仏典 2 五九頁 偈八  
 (46) 〃 〃 五九頁 偈九  
 (47) 〃 〃 六〇頁 偈十一  
 (48) 〃 〃 六〇頁 偈十三  
 (49) 大乘仏典法華経 Ⅱ 七一―七二頁  
 (50) 大乘仏典八千頌般若第二十四章慢心 二三六頁  
 (51) 宝積経 大正11―15二下  
 (52) 〃 大正11―15〇七中  
 (53) 大乘仏典宝積経 一二〇頁  
 (54) 〃 三二一頁  
 (55) 大仏典法華経 Ⅱ 九頁九行(法師品)  
 (56) 〃 九頁十三行  
 (57) 〃 十頁六行  
 (58) 〃 十頁十一行  
 (59) 〃 十頁十三行  
 (60) 〃 十一頁六行  
 (61) 〃 十一頁七行  
 (62) 〃 十四頁

- (63)                   〃                   十五頁  
 (64)                   〃                   一二四頁 (分別功德品)  
 (65)                   〃                   一二六頁  
 (66)                   南門の跡はたしかに存在するが、それはあくまで補助的、通用門的なものであった。

参考文献

- Rosenfield *Dynastic Arts of kushan*  
 John Marshall *Taxila*  
 Debala mitra *Buddhist monument*  
 Nagaraja *Buddhist Architecture of Western india*  
 Fergusson and Burgess *The cave temple of india*  
 京都大学   バサーワルとジエララバードカプール  
               〃                   メハサンダ  
               〃                   ドウルマンテーベとラルマ  
 杉本卓洲   インド仏塔の研究  
 塚本啓祥   法華経の成立と背景  
 静谷静雄   静谷目録  
               〃                   初期大乘仏教の成立過程  
 平川 彰    初期大乘仏教の研究  
 高田 修    仏像の起源  
 山田竜城   大乘仏教成立論序説